

序

〔知働化研究会誌第2号〕

知働化研究会
Executable Knowledge and Texture Laboratory

巻頭言

知働化研究会誌創刊第1号の巻頭言として、同研究会コンセプトリーダーの山田正樹氏は、「知働化」誕生以前の一つの私的物語を知働化前史として書き記し、その中で、すべての知働化研究会メンバー一人ひとりにそれぞれの知働化前史があり、これからは知働化研究会という紡ぎ車が、それらの糸を紡ぎ、やがては大きな織物へと織り上げられることになるはずだと述べられていた。あれから5年の月日が経ち、各メンバの探求によって、知働化という織物の文様がいくつか垣間見れるようになってきたと思う。

知働化研究会発足の経緯は、第1号「知働化前史」に述べられている通り、山田氏の「実行可能知識と様相（Executable Knowledge and Texture）」の研究が契機となり、これからは「知」を「働かせる」時代という期待をこめて「知働化研究会」と命名した。以降、知働化研究会では、コンセプトリーダーという役割を山田氏が担い、何ごとにもとらわれず、普段通りのことをして、好きなことを言っていたいくことにしている。

実は、「何ごとにもとらわれず」というのは、俗世の煩悩、日常のしがらみなどがあり、極めて困難なことである。この研究会誌の巻頭言を書くという日常のしがらみも、こうして、運営リーダーの私（大槻）が行っている。また、次の方向性を示す作品として随想の章にて、「山田正樹氏『知働化の最前線』解説」を私が僭越ながら山田氏の講演の解説を試みている。

当初、毎年発行する予定の知働化研究会誌だったが、扱うテーマや探求の深さを鑑み、ある程度考えが進んでから発行する方式にしたのは、作品の品質を確保する上でやむを得ないことだと思う。それぞれのメンバが設定しているテーマは、それなりに深く、熟成・熟考を要するものであり、作品としての形として現れるまでに時間がかかる。ここに第2号を形にすることができて、一安心するとともに、これからの方向性を示すことにためらいがあるのも正直なところである。

第2号の全体のトーンとして、創造性や本来のソフトウェアの役割が意識されてきているように思える。ソフトウェアについて考え続けていると、誰しも同じようなところに行き着くから不思議なものである。ただし、この傾向をどのようなコトバで表すべきかは、未だ躊躇するところが多い。山田氏の言葉を借りれば「世の中には、言葉が溢れていて、加えるべき言葉が見つからない」のだそうだ。

ただ言えるのは、人間の個としての認識や認知の世界が中心になりつつあるということである。人工知能の分野でも心・自我・意識・学習といった事項が話題になってきているし、経済学でも人の行動の裏にある心理的要因に関心が移ってきている。システムエンジニアリングでの「システム思考」、デザイン論での「デザイン思考」なども、考え方やものの見方といった認識・認知領域からのアプローチが盛んになってきている。おそらくソフトウェアの領域も例外ではなく、ソフトウェアの実行がもたらす影響や、計算モデル、言語活動などを支える認識・認知の問題は大きなテーマとなっていくと思われる。

「知働化」「実行可能知識」の「知」や「識」に正面から挑む。こういった方向性やトーンを研究会誌全体から読み取っていただければ幸甚である。

知働化研究会運営リーダー 大槻 繁